

われる。その構図はフランスの Dordogne の Laussel に
のこる氷河期後期の出産図と同じ正面図である。図の視
点が産婦と対座する助産者の位置にあることは、これを
えがいた者が助産も行っていた女性であることを暗示す
る。すなわち縄文時代には女性による助産行為があつたと考
えられる。

(虎の門病院産婦人科)

江戸期の子育ての書に現われた 乳幼児発達観

小嶋 秀夫

江戸時代を中心としたわが国の子育ての書の中で、乳幼
児の発達についてどのように考えられていたかを構成して
みることに、この小論の目的である。それがどのような意
味をもちうるのか。主なものはつぎのようである。

(一) たんに乳幼児を取扱う技術・方法を問題にするので
はなく、その背後にある信念・価値のシステムをも問う
ことにより、特定の方法がどのような意味で用いられたか
を明らかにできるであろう。

(二) 乳幼児の行動的・心理的発達の過程についての当時
の理解の中に、今日から見ても重要な認識や洞察が認めら
れる。乳幼児をどのような存在だととらえ、どのように取
扱ってきたかを知ることが、わが国の育児文化の伝統を考
えるうえで、重要な意味をもつであろう。現在の中に、過

去が存在し機能している可能性がうがかえるのである。

(三) 医師、儒者、あるいは心学者など、乳幼児の取扱いを論じるものは多様であった。しかし誰が説くにしても、子育て論は理論のための理論に終っては意味が薄い。そのため、論者は読み手を意識して、説得性のある論理を展開しようとする努力の跡がうかがえる。したがって、どのような存在である子どもを、どのような目標に向かって、どのように導くかの三側面をうまく関連させながら論を進めることが多い。そこで、子育て論そのものの分析だけではなく、それを説く論者の内部過程と、論者と読者とを取りまく社会の在り方までも、視野の中に入れる必要性が示唆されるであろう。

以下に分析結果の要旨をいくつかの項目に分けて示す。

敏感で脆い存在 乳幼児は心気が不安定で、外的な感覚的・心理的刺激の悪影響を受けやすい敏感で脆い存在だとされた（小児必用養育草、小児戒草など）。したがって、乳幼児に強い刺激を与えることは極力避けるべきだと主張された。それは読者の不安に訴えて、ときには脅すようにして論じられた。ついでながら、民俗学が記述している俗信・

風習の中に、それと類似した考えを見出すことができる。

千金要方に、心気不安定な乳児の養育には、大声で驚かさないうように、安らかに抱いて怯えさせないようにし、そして雷鳴時にも注意すべきだという記述がある。もつとも、小さく驚くのはプラスの効果があるとしているのは興味深い。過度の刺激を避けるとともに、子どもを外的刺激に徐々に慣らして鍛えていくことが大切だとされたのである。

生物学的成熟に応じた訓練 敏感だということは、乳児の感覚がよく働いているということでもある。事実、千金要方のなかの記載は、一歳時の歩行にまで至る乳児の姿勢・移動の能力の発達について、本質的に今日のペースと同じ標準を示すとともに、生後六十日で視覚発達がかなりよく進むという、今日の知見と同じ発達の里程碑を設定している。

香月牛山が小児必用養育草のなかで、「王隠君の説に……」と述べているのは、元の王中陽の泰定養生主論への言及と考えられる。養生主論では、生後六十日でのかなりよく進んだ視覚発達により、乳児はものごとの識別を始め

るから、周囲のものは乳児を正しく導く必要があることを主張している。また、この時期に乳児を手荒く扱うと、のちのちまで悪影響が及ぶと述べている。それらの記述を受けて、牛山は乳児の微笑・発声に随伴した養育者の応答性の大切さを説いている。このような、子どもの行動や能力が変化する時点をとらえて、子どもを望ましい方向に導くべきだという主張は、成熟論とおとなの社会の立場からの導きとの結合といえる。

初期経験の影響の重視 新生児期（さらにさかのぼれば胎児期）からの医学的あるいは保健的取扱いを間違うと、後後まで残る疾病を生じさせやすい。それだけでなく、乳児が環境との相互作用を通してもつ感覚的経験は、疾病の原因となったり、望ましくないパーソナリティをもたらしたりすると考えられた。その意味で、子育て論者は、発達の初期の段階から、子どもを正しく取扱うことの重要性を強調した。また、積極的訓練も初期から行うべきだとされた。

しかし、訓練開始は早ければ早いほどよいのではなく、子どもの内面から行動が発してくる適期をとらえるべきだ

とした。環境が個人差を生じさせる主な要因だとしても、子どもは環境の力によって受動的に形成されるのではない。子どもは自律的に外界を取りいれて変化していく生活体のようなものだともなされた。そのため、ややもすると悪くなりがちな心理的な生育環境を望ましく調整することが強調されたのである。

（名古屋大学教育学部）